dec monthly vol.441
2022年6月1日発行
発行人 倉内 公嘉
編集人
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17 URL http://www.decnet.or.jp/ E-mail dec_info01@decnet.or.jp

理事長就任のご挨拶

この度5月31日開催の定時総会並びに理事会におきまして、山口登美男の後任として、倉内公嘉が選任されました。

(一社)北海道開発技術センター
理事長　倉内　公嘉

こんにちは！
このたび、decの理事長に就任いたしました倉内です。
よろしくお願いいたします。

decは、ご賛同いただいている多くの会員の皆様、関係各位のご支援の元に事業を進めさせていただいております。この場をお借りしまして、改めてお礼を申し上げます。

引き続きdecは、北海道の地域に密着した取り組みや調査研究を進めてまいります。北海道の魅力と可能性を更に一層高めていくための取り組みや北海道の不利な条件を克服し価値ある資源に転じるための調査研究に力を入れて行きたいと思っています。

具体的には、シーニックバイウェイやサイクルツーリズムの推進など、北海道の自然・文化・歴史等の活用やコミュニティを通じた観光まちづくりの取り組み、固有課題である雪氷障害対策や広域分散型の地域構造を踏まえた交通問題、野生生物と交通の問題など、時代の要請を踏まえた調査研究に努めたいと思います。

また、「ほっかいどう学」の取り組みとして、全道でみち学習を展開いたします。認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムと連携し、各開発建設部、小中学校の先生方によるプラットフォームを全道10カ所に組織し、インフラ教育の検討と実践を行います。

ほっかいどう学に限らず、同じ志を持つパートナーシップやプラットフォームの下支えをすることがdecの役割だと思っております。引き続きよろしくお願いいたします。

notice

「シーニックドライブマップ2022年度版」発売中！ 定価200円（税込）

今年のテーマは、地域の景色を満喫できる「シーニックデッキ&おすすめビューポイント」です。その他、地域イチオシの食を楽しむ「おいしい道の駅」や、眺望良し！食べて良し！の「おすすめシーニックなカフェ」、寄り道スポット、ビューポイントと一緒に、シーニックバイウェイ北海道のスタッフがおすすめするドライブコースを紹介します！

全道の道の駅で購入できます！

編集後記

先日、札幌初開催のバンクシー展に行ってきました。世界中、街のいたるところに突如として作品を出現させ、そのメッセージ性がマスコミにも取り上げられてきたバンクシー。部屋に飾りたくなってしまうほどポップでお洒落な作品の数々は、政治、文化、倫理、戦争などのテーマを取り上げたメッセージ性の強いものでした。「世界で最も大きな犯罪を実行するのは、規則を破る側ではなく、規則を守る側の人間だ。命令に従う連中が爆弾を投下し、いくつもの村を破壊する」というバンクシーの言葉が紹介されていたのですが、現在の世界情勢とも合わさって、とても考えさせられました。(RW)

「ガール・ウィズ・バルーン」　この絵が140万ドルで落札された直後、バンクシーにより額縁に取り付けられたシュレッダーが自動的に作動し、半分以上細断されてしまったというエピソードは記憶に新しい方もいらっしゃるのではないでしょうか。

「ゲーム・オブ・ウォー」
反軍国主義をテーマに描いた作品

いい年してはしゃぐ(笑)

News letter since 1985 01 JUN
Hokkaido Development Engineering Center
dec monthly
2022.6.1 vol.441 デックマンスリー

● Monthly Topic (マンスリートピック)
〈寄稿〉北海道ドライブ 観光促進プラットフォームの取組み
● dec Report (デックリポート)
令和4年度 dec定時総会

dec Interview >>> 温泉旅館矢野 女将　工藤　夏子 氏

「お城と桜」にとどまらない松前の豊かな魅力を味わっていただける場をつくっていきます。道南の町々はそれぞれに個性的。ぐるっと回って楽しんでいただきたい。

北海道最南端にして日本最北の城下町・松前町。松前城すぐそばの老舗旅館「温泉旅館矢野」の女将・工藤夏子さんは「津軽海峡マグロ女子会」の代表としても活躍する元気印の人。コロナ禍の試練に耐えつつ、地域独自の魅力発信に情熱を注ぐ女将にお会いしてきました。

「温泉旅館矢野」は松前に創業して70余年。女将3代で営んでこられました。まず、宿のゆかりとご自身の歩みについてお聞かせください。

もともと隣町の福島町で、新潟県佐渡出身の曾祖母が「矢野旅館」を営んでいました。現在はありませんが、そこが本家です。祖母が継ぎましたが、戦後、祖母の兄が復員して後継者となったので、祖母は福島町を離れ、松前町の現在地に旅館を開業したのです。昭和26年のことで、最初は3部屋から始めました。当時は国鉄の松前線があり、駅前に宿街があったのですが、そこは土地が高くて祖母には手が出せず、お城のそばにしたのです。「駅はなくなるかもしれないけど、お城はなくならないからね」と話していました。

その後、母が女将を継いで徐々に施設を大きくし、温泉も掘って現在のような温泉旅館にしました。ちなみに父は七飯町で「日乃出食品株式会社」という豆腐屋を営んでいましたが、シーニックバイウェイ北海道の草創期に「どうなん・追分シーニックバイウェイルート」の副代表となり、広域での観光や地域づくりに力を入れていました。シーニックバイウェイとのご縁は本当に長いのです。

私は札幌の大学を卒業後、北洋銀行に就職しました。母は旅館を継がなくてもいい、と言ってくれていたのですが、曾祖母から母まで女系3代の旅館業ですからDNAのなかに「旅館」が組み込まれているのでしょうね(笑)。30歳で銀行を退職し、女将への道に転身しました。

当時は旅館経営のことは何も知りませんから、母に命じられるままに、調理師免許、送迎用マイクロバスの運転免許を取りに行き、さらに道東の有名温泉旅館に4カ月ほど見習い修業へ。それから松前に戻りましたが、ほどなく結婚、出産となり、本格的に若女将として働き始めたのは2008年からでしょう。2018年の北海道胆振東部地震の年に母が一線を退くことになり、私が三代目の女将となりました。

2020年以来、コロナ禍で旅館業界も深刻な影響を受けてきました。今の思いをお聞かせください。

私の母は「戦後より苦しい」と言っています。この3年は、年ごとに辛さの中身は違っていますが、最初の年の辛さとは「旅館は地域の重要なインフラ拠点」であることが周囲に理解されないことでした。普段なら旅館は楽しいことをするところですが、コロナ感染拡大のような

dec Interview

くどう　なつこ
1976年松前町生まれ。東海大学(札幌)国際文化学部卒業後、北洋銀行入行。営業部、国際部などに勤務し、実家である温泉旅館矢野の経営を継ぐため30歳で退職。修業期間を経て2008年若女将に。18年から女将を務める。14年「津軽海峡マグロ女子会」を設立し、北海道側とりまとめ役として活躍。趣味はスノーボード、ゴルフなどアウトドア・スポーツ。

非常時には遠方から来られる医師など医療関係者の滞在先になりますし、災害時には道路工事や電気工事などの関係者の宿になります。へき地と呼ばれるような末端の地域の宿泊業ほど、そうした人命やインフラを支える人たちのための基地としての役割は大きい。にもかかわらず、「こんな時期に旅館を開けて観光客を泊めているの」と誤解されるのは辛かったですね。それでなくても小さな町ですから、1人でも感染者が出ると、誰が持ち込んだのか、と探り合うような雰囲気がありました。

桜の名所として名高い松前町で一番の老舗旅館「温泉旅館 矢野」

都市部でも感染者が激増して医療体制が崩壊しそうなときに受け皿になったのはホテルや旅館です。私も松前で、もし感染爆発しそうになったら町民の方々に館をどう使ってもらおうかと、入り口や動線の設け方を検討したりしました。あらためて宿の役割について深く考えさせられましたね。

経営的には、この3年間、トップシーズンの5月の売上げがほとんどゼロです。実は最も苦しいのは今春です。緊急事態宣言などで補助が出る間は休業しても雇用を守ることができましたが、今年は3月から諸々の規制解除となり、以前のような休業支援策はなくなりました。けれど、お客様が急に戻ってくるわけではありませんから、どうしのげばいいのか、というところです。

コロナによる3年間のブランクは大きく、「現役」感を取り戻せない感覚さえあります。現在、インバウンドの受け入れを徐々に増やす方向にあるようですが、今のような状態が続くなら、お手上げだ、というのが実感ですね。

コロナの苦境のさなかでも「津軽海峡マグロ女子会」の取り組みや道南のサイクルツーリズムの推進に努めてこられました。

「津軽海峡マグロ女子会」(以下「マグ女」)は、北海道新幹線開業(2016年)に備えて2014年に結成した青森と道南の女性たちによるまちおこしグループです。青森側のとりまとめ役は大間町の島康子さん、北海道側は私で、約80名の多様な職業の女性たちが参画しています。その志は「津軽海峡圏の元気づくりの牽引役になること」ですが、重視するのは「人とのつながり」と「地元に光を当てる」こと。「私たちの住む町、人がパビリオン」という心意気で「マグ女のセイカン博覧会」という旅のプログラムを2016年から開催してきました。東京などの旅行代理店による「発地」の発想でなく、「着地」である各地域から独自性の高い素材を提案・企画し、販売することを実践してきたのが「マグ女」です。

ただ、コロナ禍になってからは活発な交流や大きな動きはできず、小さいけれど、できる範囲でやってきました。「どうなん・追分シーニックバイウェイルート」との関連では2018年からサイクリングツアーにかかわらせていただきましたが、そこで「マグ女」との連携が大きく打ち出されたのは2020年秋の「チャリ旅みなみ北海道ー松前・江差の歴史探訪サイクルツアー」(2泊3日)でした。当時、青森や函館は感染者が少ない状況でもあり、青森からの参加者も得て青函交流を図ることができました。ツアーでは、松前、江差、木古内とそれぞれに「マグ女プログラム」を用意しましたが、松前は「松前散策と藩主料理」。お殿様(14代藩主・松前徳広)の婚礼の祝い膳を再現した「藩主料理」は当旅館独自のおもてなしです。今年こそ、「マグ女」やシーニックバイウェイ北海道の活動を本格的に展開できたらいいですね。

津軽海峡マグロ女子会(左端が工藤さん)

「チャリ旅みなみ北海道ー松前・江差の歴史探訪サイクルツアー」でのひとコマ。矢野旅館を出発。

松前ならではの意欲的な取り組みを旅館敷地内で進めておられます。北前船の歴史を刻む土蔵を改装した食事処「居見世(いみせ)・茶蔵sakura」が今夏オープンの予定ですね。

今夏のオープンが待たれる改修中の蔵

当旅館が駐車場として所有する土地の一角にあるのが「松本家土蔵」で、その改修を進めています。松本家は松前藩船「長者丸」の船頭を代々務めて財を成した一族で、土蔵は1831年(天保2年)に初代・金蔵によって建てられたもの。現在、町の指定文化財となっています。

収蔵されていた長者丸ゆかりの貴重な美術品や史料は松本家によって引き上げられたり、学術的価値のあるものは専門的な調査で収集済みですが、その後にも蔵には往時の航海や生活がしのばれる生活用具などがたくさん残されていました。

蔵そのものは瓦葺2階建(建坪12坪)で、立派な梁をもつ堅牢なつくりですが、長年、風雪にさらされたままだったので、破損している部分は多く、大幅な改修が必要でした。ただ、町の文化財ですから、自由にクギは打てず、床材も保管しなければならないなど制約は多く、町の教育委員会の許可を得て、可能な範囲での補修をしながら「居見世(いみせ)」として再生することになりました。

「居見世」とは、江戸時代の座敷に座って食事ができる店のこと。宿泊のお客様に特別なリザーブ空間として夕食を楽しんでいただいたり、昼はカフェとしてくつろげる場所にと思っています。お客様には190年の歴史を持つ蔵の価値を身近に感じることで、お城だけではない松前の魅力を味わったり、知的欲求を満たしていただければ。専属スタッフも置いて、そのためのいろいろな工夫や演出を考えているところです。

蔵の改修・再生には国の事業再構築補助金の助成を受けますが、自前の負担も大きくて大変です。ただ、祖母も母も旅館を大きくするのに苦労を重ねてきたわけですから、私もこの苦労を乗り越えていかなければと思っています。

蔵に残された「天保二年」と記された木札

常に前向きに挑戦されている姿勢が素敵です。それを支える思いや信念とは。

1分1秒でも長くお客様に松前に滞在していただきたい、という思いがあります。そのために、松前のありとあらゆる素材を健気にお客様に提供したいし、それができる場所をつくりたい、というのが私の揺るぎない目標です。うちの旅館だけ目指して来ていただこうというのではなく、松前のものを味わい、さまざまなものを消費していただくことで町が潤い、それによって旅館が成長していくことができれば。

松前藩屋敷の「浮き紫陽花」

松前では、5月に「さくらまつり」、夏は「あじさい祭り」とお盆の祭り「松前城下時代まつり」、9月は「マグロまつり」などが恒例行事ですが、コロナ禍になってからは祭りが一切、中止となりました。地元の人が楽しむ夏祭りも3年続けて途絶えると復活させるのが大変になりますから、今年はなんとか少しずつでも行事を回復させていきたいですね。地元で楽しむことが観光に向けた発信にもなり、素材になるのですから。

3月に開通となった函館江差自動車道

町の観光協会も手弁当ながら頑張っている活動がたくさんあります。例えば、地元で「美しい」と評判の藩屋敷(松前公園内)の「浮き紫陽花」。松前公園を彩る2千本のアジサイを手入れした際の剪定で集まった花を水路にびっしり浮かべたもので、今年も7月中旬から見られる予定です。本当にフォトジェニックで、これだけを目当てに訪れる人も増えるのではないかと期待しています。

「マグ女」やシーニックバイウェイの活動を通じて思うのは、いろいろな町々がその個性を「とがらせていく」ことの大切さです。隣町同士で同じようなことを目指すのではなく、地元の気風や昔からあるものを大事にすることが面白い旅を提供することになる。例えば、同じ道南でも商人のまち・江差と殿様のお膝元の松前では全く気風が違います。道外から道南を訪れる観光客には函館滞在で終わりではなく、ぜひ道南をぐるりと回って、その多様性を楽しんでいただきたい。これは何十年も前から言ってきたことですが(笑)。

函館江差自動車道が3月に木古内ICまで開通となりました。函館から松前が近くなりましたね。

函館空港をよく利用しますが、松前から3時間と見ていたのが、2時間ほどで大丈夫になりました。木古内から空港までの大幅な時間短縮はとても助かっています。マイクロツーリズムがよいというご時世ですから、函館の人もこの道路を活用してもっと松前に遊びに来ていただきたいですね。市内から2時間足らずとちょうどいいドライブになり、1泊旅行にも適していると思います。今のところ、あまりそうした動きが見られなくて残念に思っています。

道路インフラの拡充は、観光面で期待する以前に生活者としての切実な願いです。松前町に医療機関や商店は少ない。大雨が降ると白神岬のあたりで通行止めになることが多く、そうなると食料が届くかどうかの不安がつきまといます。食料を運ぶための、救急車が間に合うための、住民が生きていくための道をつないでください、というのが本音ですね。

北海道の素晴らしさは景観や海の幸、農産物だと広く知られていますが、それらを支えているのは末端にある小さな町々です。でも、そこで暮らし続けることはとても厳しい。そうした小さな町の存在価値や存続のためのインフラの重要性がもっと広く理解されればと思っています。

〈寄稿〉北海道ドライブ観光促進プラットフォームの取組み

北海道開発局開発監理部開発連携推進課 開発企画官　瀬能　博之氏

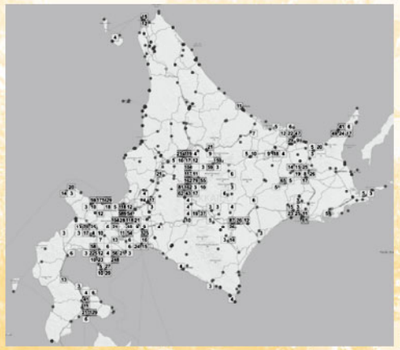
背景と経緯

北海道開発局は、平成28年3月に閣議決定された「第8期北海道総合開発計画」に基づき、北海道の強みである「観光」を戦略的産業として位置付け、各関係機関連携の下、「世界水準の観光地」の形成に向け、ゲートウェイである空港・港湾、また、都市間を結ぶ高規格道路等のハード整備に加え、ドライブ観光の促進に取り組んでいます。

北海道におけるインバウンド観光は、季節的・地域的に需要が偏在していることが課題となっていることから、北海道開発局および道内観光の関係機関が連携し、主にレンタカーを利用して北海道内を周遊する外国人観光客を対象に、閑散期における旅行需要の喚起と地方部への誘導を目的とした「北海道ドライブ観光促進社会実験」を平成28・29年度に実施しました。

平成29年度には、公募により選定された株式会社ナビタイムジャパン（以下、「ナビタイム」という）が運営するスマートフォン用アプリケーション「Drive Hokkaido!」（以下、「アプリ」という）を用いた社会実験を実施しました。アプリから取得されたGPSデータを基に、外国人ドライブ観光客の移動経路や立ち寄りスポットの分析を行った結果、他の移動手段も含む全旅行者データと比較して、外国人ドライブ観光客は地方部への宿泊割合が高く、また旅行日数も長いことから、外国人のドライブ観光の促進は地域偏在の緩和に有効であることが分かりました。また、継続したデータ取得・分析を行いつつ、これらのデータを活かした観光施策やプロモーション活動等を推進していくことが重要であることが示されました。

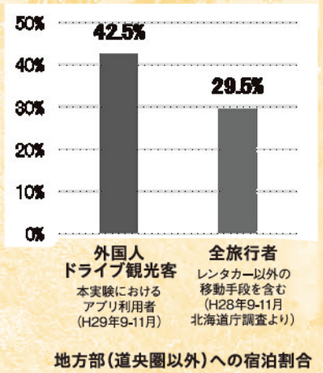
スマーフォンアプリ「DriveHokkaido!」



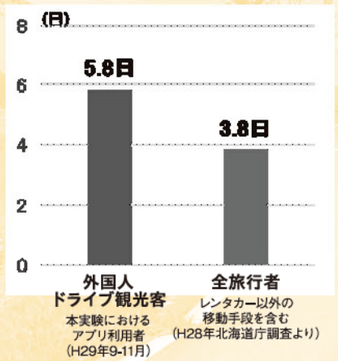
滞在者数（10kmメッシュ表示）

GPSデータ測位者数（10kmメッシュ表示）

【滞在について】取得した外国人旅行者GPSデータのうち、同一1kmメッシュ内に30分以上滞在した人を「滞在」と定義



地方部（道央圏以外）への宿泊割合



平均旅行日数

北海道ドライブ観光促進プラットフォームについて

前述の取組・検討を踏まえ、北海道開発局及びナビタイムは、北海道を訪れる外国人観光客の季節変動や経年のデータを継続的に把握し、具体的なドライブ観光の施策検討や効果検証につなげ、世界水準の魅力ある観光地づくりに貢献するなど、インバウンド観光による北海道の地域活性化の推進に向けて緊密かつ組織的な連携・協力体制を構築するため、平成30年4月16日に連携協定を締結しました。

更に、同年6月28日には、アプリから得られる外国人観光客のデータを共有し有効に活用することで、北海道における外国人ドライブ観光の促進を図ることを目的として、国及び地方公共団体、観光関係団体などで構成される「北海道ドライブ観光促進プラットフォーム」（以下、「プラットフォーム」という）を立ち上げ、取組を本格的に開始しています。

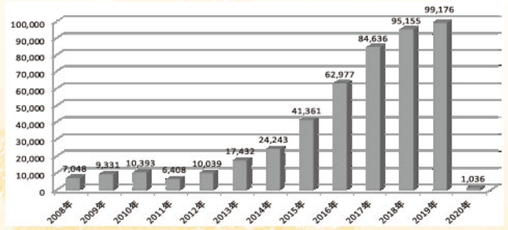
立ち上げ当初は、11機関の構成員からスタートしましたが、現在では106機関（令和4年5月末現在）と非常に多くの機関が参加しています。

データ提供に関しては、アプリから得られる「外国人観光客の測位者数（10kmメッシュ及び1kmメッシュ）」、「外国人観光客の滞在者数（10kmメッシュ及び1kmメッシュ）」、「外国人観光客の流動図（市町村間及び10kmメッシュ間）」、「外国人観光客の国籍及び来道回数」、「国籍別・市町村別の測位者数及び滞在者数」などを、希望する構成員に無償で提供しており、それぞれの観光事業に活用して頂いております。

プラットフォーム会合について

地方公共団体や観光関係団体等との情報共有の場として、令和元年度から毎年、「北海道ドライブ観光促進プラットフォーム会合」を開催しています。

昨年度の第3回会合では、新型コロナウイルス感染症の影響による来道外国人観光客の大幅な減少や第8期北海道総合開発計画の中間点検を踏まえ、国内旅行者を含めたドライブ観光促進に着目して開催しました。



外国人レンタカー貸渡台数推移（台）（北海道地区レンタカー協会連合会調べ）

「北海道ドライブ観光促進プラットフォーム」第3回会合

●令和3年12月15日（水）13:30～（札幌第1合同庁舎2F講堂）
●参加者数108名（会場48名、WEB60名）

01 北海道ドライブ観光促進PF会合提供データ概要について

北海道開発局 開発監理部 開発連携推進課

★北海道ドライブ観光促進PF提供データ概要
★スマートフォンアプリケーション（GPS機能）を活用した北海道における日本人の周遊・滞在状況（地域別のデータ含む）

2019年と2020年を比較した結果、コロナ禍においても岬やキャンプ場等の屋外施設では増加傾向が見られた。

02 移動データから読み解く日本人の行動変容 －ドライブ観光シーンへの影響－

㈱ナビタイムジャパン 地域連携事業部長　藤澤 政志 氏

★コロナ禍における日本人旅行者の目的地の変化

- 訪日外国人に人気の観光地への日本人旅行者の訪問が増加。〈ex.白川郷（岐阜県）、アドベンチャーワールド（和歌山県）〉
- 卒業シーズン、紅葉など季節イベントの観光形態はコロナ前と変化がない。
- 景観プラスアルファを楽しむドライブが人気。

03 北海道ドライブ観光の現状とアフターコロナを見据えた新たな取り組みについて

北海道地区レンタカー協会連合会 会長　佐藤 譲 氏

★北海道内主要空港のレンタカー利用状況について

- 2020年度の外国人レンタカーの利用は大幅に減少。
- 日本人の利用は、緊急事態宣言解除後の10月から平時に戻りつつある。
- 訪日外国人の今後の受入れに向けて、交通ルールの周知など受入れ体制の整備が必要。

04 Withコロナ時代の北海道観光戦略 －観光地経営論の視点から－

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 准教授　石黒 侑介 氏

★Withコロナ時代の市場展望

- 国際観光市場は10年に1度のペースで前年割れ。
- 2019年水準に戻るのは2024年下半期以降。
- 台湾を軸としたアジア市場と欧米のビジネス市場から回復。

★ポスト2020の北海道観光戦略

- 周遊型から滞在型へシフト。

最後に

6月10日から外国人観光客の入国が一部認められるなど、徐々にではありますが、インバウンド観光にも動きが出てきたところであり、今後は、アフターコロナを見据え、北海道におけるインバウンド観光の更なる活性化のため、関係機関と連携し、引き続き、データ取得・分析を行いつつ、これらのデータを活かした観光施策やプロモーション活動等を推進していきたいと考えています。

なお、プラットフォームに参加いただける地方公共団体・観光関係団体等を随時募集しておりますので、お気軽に当課までお問い合わせ頂ければ幸いです。お待ちしております。

令和4年度 dec定時総会

令和4年度dec定時総会が5月31日、dec4階大会議室において開催され、予定の5議案が滞りなく承認されました。令和3年度の事業報告の概要は以下のとおりです。
令和3年度の事業報告の詳細については、decホームページ(http://www.decnet.or.jp/)をご覧ください。

会員数(令和4年3月31日現在)　法人会員:216社　個人会員:68名

調査研究事業

雪氷障害に備えた安全な社会基盤に関する研究

気候変動等の影響により極端化する暴風雪災害や雪害、高齢化や人口減少等の影響により顕在化する除排雪問題や冬型事故など、積雪寒冷地特有の雪氷障害についての調査を行い、地域や社会基盤を守るための研究、提案を行った。

中標津町西養老牛地区、弟子屈町仁多地区において、簡易型タイムラプスカメラを用いて、現地の吹雪状況の観測を行った。

札幌市の冬期転倒事故の発生状況レポートを作成

地域コミュニティを通じた地域振興及び観光まちづくりに関する調査研究

地域協働による各種調査・取組を通じて、地域資源の付加価値化や新たな地域コミュニティの創出及び産学官連携推進を目的として、観光・地域づくりに関する調査研究を行った。具体的には、道路沿道の景観保全や環境保全及びその活用に関する調査研究を地域活動団体の支援も含めて実施した。また、地域協働による先進事例の収集、地域ブランド力の構築に向けた新たなビジネスモデルの調査研究や地域ブランドの創出に向けた研究会等への参加と情報交換等を実施した。

モビリティ・マネジメントや新技術を活用した公共交通の維持・発展に関する調査研究

今後の公共交通の維持・発展を目的とし、モビリティ・マネジメントやMaaS、CASE時代に対応した道路整備、交通結節点(バスタ)等のあり方について、調査・研究を実施した。なお、研究成果については、「土木学会」、「日本モビリティ・マネジメント会議」、「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」、「おでかけ交通博」及び「日本地域学会」等で報告した。

第16回日本モビリティ・マネジメント会議の発表ポスター

北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究

世界水準の観光地形成を目指して、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究を行う。具体的には、これまで調査研究を続けてきた、「北海道エコ・モビリティ」「都市型サイクリング」「アドベンチャートラベル」を踏襲し、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムを担う人材の育成、受入環境の整備、ツーリズム商品の造成などについて調査・検討を行った。

コロナ禍におけるワーケーションモニターツアーの実施の様子

ほっかいどう学の推進に関する調査研究

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムと連携し、北海道総合開発計画における「ほっかいどう学」の推進や、学校教育を通じた社会的ジレンマ問題の解消に向けた調査検討を行った。また、北海道の土木史や道路史に係る調査研究を実施。そのほか、環境情報誌「エコチル」と協働による「公共交通魅力向上アイデアコンテスト」等を実施した。なお、各種研究成果については、(公社)土木学会主催の「土木と学校教育フォーラム」や、「土木史研究発表会」に参加・発表するとともに、併せて情報交換・事例収集等を実施した。

シーニックバイウェイをテーマとした研究授業(オホーツク管内)

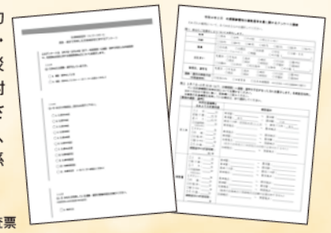
野生生物との共生に関する調査研究

北海道の道路木本緑化に関する緑化勉強会の開催、現地調査等を行い、積雪寒冷地に適した道路緑化樹の整備・保育手法に関する研究を行った。また、国道等で発生する動物との衝突事故等の被害対策検討に必要な調査研究、調査手法や対策手法の技術開発の検討を行うとともに、鉄道総合研究所等との共同研究及び国内外の学会等での発表、参加により情報収集を行った。

試験的植生復元活動として実施した、植生復元の状況についてのモニタリング調査の様子

北海道の地域防災に関する調査研究

北海道における地域防災力の向上に向けて、関係機関・団体と連携しつつ、地域防災力向上方策等について検討した。また、道内外で開催される学会や研修会に参加し、教材研究及び全国防災関係者との情報交換を行った。



Webアンケートの調査票

将来の北海道開発に関する調査研究

北海道総合開発計画のフォローアップや次期総合開発計画に資するための調査研究を行った。

各自主研究の成果概要は、decホームページをご覧ください→

役員の改選

新任役員

● 理事長:倉内 公嘉　● 理　事:竹花 賢一氏　● 理　事:中川 收氏

山口 登美男(理事長)、越前 雅裕氏(理事)、平島 信一氏(理事)は退任されました。
長きにわたり、ありがとうございました。

情報収集・連携事業

寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理

国内外の会議やシンポジウム及び学会、各種研究機関等との交流を通じて、寒地技術や交通政策・地域政策に関する技術情報を収集、整理した。

技術資料等のデータベース化に関する調査研究

業務成果及び関連資料のデータベース化、自主研究や自主プロジェクトの成果等のデジタル化を図り、管理システムの構築を継続して実施した。

「寒地開発技術委員会」の設置

寒地開発技術の開発動向や方向性の検討を行うとともに、道路事業に関わる設計基準等の検討を行った。

インターンシップの受け入れ

札幌に在住し、当センターでの勤務が可能な大学生等を対象に、働きながら研究する場を提供するインターンシップ制度を継続して行った。

沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

シーニックバイウェイ北海道の参加団体を対象に、活動団体が実施する沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業を継続した。特に、参加団体の連携事業に重点をおいて研究を実施した。また、webやドライブ情報紙を活用した地域情報の提供も継続して行った。なお、活動団体の研修派遣事業については、新型コロナウイルスの影響により実施できなかった。

委員個別訪問

「沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業」の発表会・審査会をオンラインで実施

情報誌「Scenic Byway vol.28」

dec monthly(デックマンスリー)

広報・国際交流事業

広報・出版刊行等

●ニューズレター(dec monthly)の発行12回
●Webサイトの運営(http://www.decnet.or.jp/)

出版刊行図書

●寒地技術論文・報告集vol.36の編集・発行
●第21回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集の編集

シンポジウム・セミナー

●第37回寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
●第21回「野生生物と交通」研究発表会(オンライン発表)
●アドベンチャートラベルに関するオンラインプロモーションの開催

国際交流

●米国シーニックバイウェイ団体との交流
●PIARC(世界道路協会)への参加
●日中冬期道路交通ワークショップの準備
●ATTA(アドベンシャートラベル・トレード協会)との交流

↑寒地技術シンポジウム
→第21回「野生生物と交通」研究発表会

←PIARC 第16回冬期サービスとレジリエンスに関する世界大会での発表の様子(dec大橋一仁)

開発事業等に関する調査研究の受託・・・計72件